

1. 新潟における MALUI 連携

新潟大学人文社会・教育科学系附置地域映像アーカイブ研究センターでは、新潟地域の生活のなかにある映像を発掘し、整理・保存を行い、デジタル化をするだけでなく、その内容を整理、分析し、映像メディアの社会的あり方を考え直し、新たな社会の文化遺産として映像を甦らせるべく作業を行ってきた。

現在、教育・研究に関わる MARUI（博物館・文書館・図書館・大学・産業界）においては、書籍・絵画・古文書・動画・写真・音源などのデジタル化を行い、文化資源として共有化するために、広く県内全体の文化資源を一元的に管理公開するシステム（MALUI 連携による統合型データベース）を構築することが、課題となっている。

2017 年 3 月より、MALUI 連携に向けて、新潟県立図書館「郷土新聞画像データベース」（戦前の郷土新聞発行別で約 3 万件（約 20 万紙面）と、新潟大学人文社会・教育科学系附置地域映像アーカイブ研究センターの新潟大学「にいがた 地域映像アーカイブ・データベース」（写真・動画・音源など約 3 万 5000 点）を統合して、公開・閲覧することができるようにした。

2. 地域の映像資料の領域

映像に限らず、メディアは、マス・コミュニケーションから中間的コミュニケーション領域、さらにはパーソナル・コミュニケーションの領域へとつながっている。しかし、現在、歴史学や民俗学、あるいは写真研究、映画研究においては、映像を映画会社や放送局のマス・コミュニケーションの映像と、家族写真を代表するパーソナルな映像しか想定していないことにある。

重要なのは、マスとパーソナルの間である、中間的コミュニケーション領域があることだ。これは、そのまま地域住民のコミュニティの次元に位置する。

3. 地域の映像に対する価値の転換

地域の人びとにとって、大切な写真、動画として考えているのは、既に評価の定まっている著名人や有名人や、物が写っているものである。

そうした手垢にまみれた価値ではなく、住民が日常生活のなかで、仕事や楽しみなど、なんらかの必要性があって生み出された映像こそが価値がある。その人びとの生活の上での必要性には、必ず、人と人との関係性が含まれており、そのことが重要な社会的意味をもつ。つまり、個人の記録ではなくコミュニティとしての記録としての側面をもつ。（アーカイブ映像として、記録のために撮影された映像に欠けているのは、こうした社会性である。記録のための記録はそれ以上の意味がない。）重要なのは、価値観を変えることである。

4. 地域の映像は蓄積する場所がある。

地域には必ず、資料を残す意思を持った人間がおり、文書だけでなく映像においても同じであり、どこかにまとまって存在する。それは、時に、地域の資料として、自治体が設置した視聴覚ライブラリーや、市史の編さんのために集められることがある。それらの資料は文献資料に偏っているが、映像資料も多く含んでおり、質的・量的にも優れているものがある。

それらの資料のデジタル化を促進する必要がある。しかしながら、学芸員の知識が文書や考古学などの物資料に偏っており、映像資料に対する理解が浅い。映像が重要なのは、誰でもが見て、すぐに分かることにある。素人にも分かるということは、ある意味で利活用しやすいということでもある。多くの学芸員は保存について理解できるが、利活用の視点を欠いている。

5. 地域において映像を発掘することにはどういう意味があるのか。

成果の捉え方の転換が必要である。デジタルアーカイブを構築する過程（住民が自ら参加しての写真・ビデオなどを提供して見せ合う、さらにそれをプロジェクト・リーダーが整理する）を通して、地域コミュニティが活性化することが重要である。地域のアイデンティティは語られることで確認され、新たな価値観を生み出す。たいした意味がないと思った映像が、プロジェクトによって価値があるのだと認識されることは重要である。そのことで、村や町の見方が変わっていくことになる。

こうした住民が参加するプロジェクトにすることは、映像に関するさまざまな情報を収集できることも重要である。また、収集された映像がどう使われるのか、人びとに知ってもらうためにも展覧会や、それをまとめた冊子などは非常に重要である。

※金山町での「村の肖像」プロジェクトについては、「みんなで作る「村の肖像」プロジェクト」（『広報 かねやま』631号 2017年7月）を参照。

6. 研究者（専門家）が関与することの必要性と問題。

教育・研究的利用の促進は特に重要である。学校は昔から、地域コミュニティの中心である。小学校では郷土を学ぶ授業に映像を使ってもらうことは可能だが、意欲のある先生でないと実現しにくい。授業内容に合わせたパッケージを事前に用意する必要がある。こうしたことに大学、研究者の協力は必要である。授業で過去の映像を使うことは、学校外で子どもたちが祖父母、父母と見た映像のことを話すことで、家族関係やコミュニティが活性化させる。

また、こうした映像を地域振興－観光や広報に使おうと多くの自治体が考える。しかし、気をつけなければならないのは、住民の映像は、本来、自分たちの間で使うものであって、一般公開を目的としたものでないことにある。そのためにも、事前に関係を処理し、了解を求める必要が生じる。使える映像を選択してプールしておいた方が問題は生じない。

こうしたさまざまな問題を処理するには、映像の利活用について理解した専門家（研究者）がいる必要がある。しかし、現状では、研究者の多くはアクション・リサーチ、現実に関与しながら調査することに慣れていない。また、そうした調査方法が確立しているわけではな

い。大学では、アクション・リサーチの技法を学ぶことはない。

7. 地域の映像と法的権利

マス・コミュニケーションの映像の領域は、そのままナショナル、さらにはグローバルな社会的空間を形成するものであり、こうした領域においては、著作権等の権利処理が必要となる。しかし、地域の領域であるローカルにおいては、中間的コミュニケーションとして、ある一定の限定された領域を形成する。公開する地域の範囲を絞る、あるいは、研究的・教育的利用、さらには、特定の年代を超過したものは自由利用可能にするなど、ゆるやかな社会的合意の仕組みが求められる。また、そうした社会的合意形成のために、さまざまな地域単位のプロジェクトが必要となる。

また一方で、中間的コミュニケーションからパーソナル・コミュニケーションへと広がっていくにしたがって、プライバシーの問題が大きくなる。一般公開することを前提に写されているなからだ。資料をデジタル化しても、地域コミュニティならではのプライバシーに配慮した公開が求められる。

中間的領域のコミュニケーションの資料をどうバランスをとるかは、自治体の組織や機関の判断だけでは難しい。大学、民間を含めた中間的な組織の枠組みをつくる必要がある。

8. MALUI 連携による地域データの統合が促進する問題

地域アーカイブの取組の実例は少なく手探り状態である。そこでの経験やノウハウ・具体例の共有が必要といえる。その地域や資料に合った工夫や持続可能な枠組みの構築が課題だが、それ以上に異なった機関と連携するという、新しい事態に慣れることがまず必要である。

また、異なった機関との連携とは、異なった資料・データとの統合であり、それは、本、雑誌、新聞などの文書から、写真、映画、放送、ビデオなどの映像、レコード、テープなどの音などさまざまなメディアをつなぐことでもある。

異なるメディアをデジタル化するノウハウは異なる。資料保存という観点でも文書と映像の研究者は統合されていない。さらに、残念なことに、研究は領域別に専門化されている。資料の内容について検討しようとするれば、それぞれの領域のディシプリンを横断する必要が出てくる。映像を研究すると、歴史学、民俗学、文化人類学、社会学、メディア研究、写真研究、映画研究、放送研究、映像学（芸術学）と異なった研究領域が形成されており、その全てを参照することは確かに難しい。若手の研究者であっても、こうした現実には自覚的でないと、参照しようとする努力が少ない。求められる企画力のあるコーディネーターとは、さまざまな研究領域を参照できる知的好奇心と、専門化しない自覚が必要となる。現在の研究業績、評価のシステムからは大幅にずれることになる。

しかし、研究は分断しているが、現実には、あるいは資料は重層化し融合している。

「マス」と「パーソナル」の世界

——新潟から、見えてきたこと



原田 健一 [はらだ けんいち]

新潟大学人文社会・教育科学系人文文学部教授。専門は映像社会学、メディア文化。映像・音楽の製作をするも、40代に南方熊楠邸の調査に従事することになり、研究の世界に入る。著書としては、編著『懐かしさは未来とともにやってくる—地域映像アーカイブ理論と実際—』、『映像社会学の展開 第2版』（ともに学文社）、『占領期雑誌資料大系 全五巻』（岩波書店）、『南方熊楠 進化論・政治・性』（平凡社）など。

小さな資料群の発見から始まった アーカイブ・プロジェクト

新潟大学で「地域映像アーカイブ・プロジェクト」が立ち上がって、2016年で8年になります。「地域映像アーカイブ・プロジェクト」は、写真、映画、放送といった異なる映像メディアを、「新潟」という地域を設定することで、その地域が育んできた一つの文化財として発掘、調査し、デジタル技術によって保全し、アーカイブすることを試みています。

このプロジェクトのスタートは、六日町（南魚沼市）で発見された幕末から明治の今成家写真（Fig1）、大正時代の高橋家写真と、平賀洗一（1902年～1980年：六日町で平賀医院を開業するかたわら、さまざまな文化活動を行った）が撮影した1930年代の9.5mm映像の発見にありました。最初は、量的には写真で2,000枚、フィルムで20本くらいの小さな資料群にすぎませんでした。だから僕たちはアーカイブに、「巨大なもの」というイメージは持っていませんし、巨大でなくてはならないとも思っていないのです。

六日町で発見された写真や映像の存在は、新潟大学に赴任する前に平賀さんの映画については知っていました。六日町に行ってみて、実際に目の辺りにして驚きました。「なんだろう、これ」って。それで、他にも

まだあるだろうと思って聞いたら、みんなつながっていて親戚だから「あるよ」って感じて出てきた（笑）。だから発掘は、端緒を見つけてしまうと、案外、簡単で、保存についても南方熊楠邸の調査を13年やっていたので、見当はついていました。でもその後の「研究、活用」という段階は、やることながら全く見当がなかった。

最初に、2009年2月に新潟大学で最初のシンポジウム「地域映像の力：新潟からの情報発信とアーカイブ構築を目指して」を開いて、知っていたとちぎあきらさん（フィルムセンター）や金子隆一さん（東京都写真美術館）などに来てもらっている話をしてもらったんです。

どう活用できるかというのは、案外難しいです。とりあえず資料をデジタル化して、サイトを試験的に立ち上げましたが、それからの発想は正直なかったんです。ところが写真家の榎本千賀子さんから、今成家写真を下高井戸のプロイラストスペースで展示したいと言われて（Fig2 Fig3）、手のひら大の湿板写真をB0版に拡大して展示するという方法が生まれました（2010年10月12日～23日「今成家写真 写真との出会い：江戸末期から明治 新潟にて」）。当時の湿板写真は密度が濃いからすごい迫力が出て、この拡大展示のインパクトが、その後の北方文化博物館（2011年11月3

- Fig1 今成家写真（幕末から明治初期）
- Fig2 「今成家写真 写真との出会い：江戸末期から明治 新潟にて」会場風景。甲州街道沿いにあり、夜はライトに照らされ、展示された写真は異様な光を輝かせる
- Fig3 「今成家写真 写真との出会い：江戸末期から明治 新潟にて」での著者と写真家・金村修（右）とのトークショー
- Fig4 「軌跡—伊藤家明治の絵葉書店」北方文化博物館での展示風景



Fig 1



Fig 2

日～29日「軌跡—伊藤家明治の絵葉書店」Fig4、「草莽—新潟発、写真の黎明」）などの様々な展示企画につながっていきました。こうした企画を通していろいろな人に見てもらい参加してもらいながら、プロジェクトが広がっていった感じでした。

マスとパーソナルの間の豊かな世界

アーカイブした映像群の研究は、最初は実際に発掘した映像について調査したことでわかったことを書いていたわけです。そもそも幕末に、市井の人が写真や映像を撮っているとは誰も思っていませんでしたから。それまで「幕末の写真」といえば、日本最初期の写真家である上野彦馬（うへのひこま：1838年～1904年）や下岡蓮杖（しもおかれんじょう：1823年～1914年）など、選ばれた人びとや専門のプロによるものというイメージでしょう？ でも、その予想は違ったんです。だから市井の人が撮った写真なんて、何を撮っているのか、とんでもない撮り方をしてるんじゃないかと。実際に、そこには全く違う映像の世界があったんです。

それは「マス」と「パーソナル」の間の次元があるということ——写真でいえば、いわゆる「報道写真」と「家族写真」の間ですね。そこに「コミュニティ」とか



Fig 3



Fig 4

いろいろな要素があって、その大きくて豊かな世界にさまざまな表現とか記録が生まれているらしいと、ようやく「分析の軸」みたいなものが見えてきました。その中間的な世界があると、しかもそれが新潟という一つの地域だけではないということがわかってきたわけです。

たとえば今成家写真は、そこに村芝居が映し出されていることが特徴的ですが、これ自体が「マス」でも「パーソナル」でもない「芝居仲間」というコミュニティなんです。しかも遊戯的だから、強力な関係性ですよ。そんな関係が不連続に現れてくる。何か、塊があるんですよ。理由のある塊が。発見した時、単体ではそれが何だかわからない。撮っている人たちには理由があるから、熱中してたくさん撮っているんだけど、その理由って時間が経つと見えなくなっちゃう。でもそうしたボツン、ボツンとある塊をくっつけると見えてくるんです。濃縮したものが、ぼん、ぼんって出てくる。そこが面白いんですよ。僕たちの常識がひっくり返るんです。しかも、それって新潟だけじゃない。

ともかく、これまでの「研究」がやってきた先験的な感覚で向き合うと間違えるんです。なにしろ僕たちが探している資料は、これまでのセオリーにないところから、ごぼっと出てきたりしますから。「パーソナル」と「マス」では割り切れない中間領域はかなり複雑で、とんでもない場所から資料が出てくる。個人宅ばかりとはいえ。その勘が働くまで、時間がかかりました。この間も古そうな小学校があって、放送室ありますか？ と訪ねたら、思ったとおりそこらどさつと出てきました。でも残念なことにそういうものが、捨てられる場合が結構あるんです。

失ったかもしれない風景や記憶を掘り起こす

映像というとなんでいうか、都会的なものという印象なんです。考えてみると、幕末の今成家も中山間地域といわれる六日町から出てきている。もっとすごいのは、秘境といわれる奥只見（おくたみ）、福島か

ら見ると奥会津なんです。その山奥の村に角田勝之助（Fig 5）（1928年～）という、村で60年も写真を撮り続けていたりする、不思議な人が現れるわけです。まだ存命です。商売にしているわけではなくて、ただ映像（写真・8mm・ビデオ）を撮っている。でも村の人はみんな知っていて、写真を頼むとちゃんとプリントしてくれるから貴重な「私設写真館」になっている。そんな映像が60年も積み重ねられて、いつのまにか、村のコミュニティの映像記録庫、アーカイブになっている。

それから、中俣正義（1918年～1985年）の発見も大きかったですね（Fig 6）。中俣さんは新潟という地域のなかで、ずっと映像を撮り続けた人です。彼の写真は10万コマあり、それを今、デジタル化しているわけです。彼は戦後、県の観光課にいて映画も写している。元々民俗的なことに興味があったのと、戦争での経験がもとになって「記録」の重要性に気づいて、帰郷後、まず、地元六日町の欠之上（かけのうえ）の自分の村でさまざまなことを写真で写した、それが面白いのです。それらの写真は、実際は彼の一族で演じていた再現写真だったということが、現地（池田記念美術館）での展示中（2015年9月4日～10月6日「光の記憶—南うおぬま地域映像アーカイブ」（Fig 7）に、親族からの証言でわかったんですよ。つまり、中俣さんの写真とか映像は、自分の子供の時の記憶を再現しようとしていたものだったんですね。そういう中俣さんの創作の秘密が見えてくると、写真や映像をただデータ化して公開する以上のことが大切だと考えるようになりました。

たとえば2015年11月に、南魚沼市の城内小学校で「光の記憶」展の一環として行った地域映像のワークショップ（Fig 8）（11月から12月にかけて、5つの小学校で新潟大学地域映像アーカイブの映像を使った授業を小学校の先生方が行った）をした際に、中俣さんの写真に『雪の花嫁さん』というのがあって、農作業に入る前の3月頃、婚礼を上げるために雪の中、村から村へお披露目に歩くという新潟の山の方の慣習を写

した映像があるのですが、祖父母参観の授業ということで、来ていた小学生の祖母のヒョウ柄を着たまだ若いお婆さんが「私もやらされたの」って、「3時間も歩いた」とか言ったんです。もうね、子どもたちもフーと、大喜び。つまり、新潟には、この百年で僕たちが失ったかもしれない慣習や風景が、記憶がまだぎりぎり残っているわけです。それをもう一回掘り起こす。それが重要なんだと。

そのためには「アーカイブの共有化」が必要だと思います。もともと南魚沼にあったものだから、返していくと言った方がいいかも知れません。でも、ただ返しても使えませんよね。そこで我々大学も教育機関だから、小・中学校のようなところから入っていく。そういった感じで、去年あたりから活動もずいぶん広がって、ようやく発見・発掘から利活用までのサイクルが見えてきました。

「地域映像アーカイブ・プロジェクト」の今後の展望としては、今年の6月を目標に、県立図書館にある10万コマの新聞のデータベースと地域映像アーカイブの映像のデータベースを統合しようとしています。そこには絵葉書も、音声記録も入れようと思っています。他の機関のさまざまなデータもつなげよう。

こういうことをしているのは、たとえば自治体が市史を編纂するときなどに集めたものがそのままあったり、各地の機関の努力でデジタル化されたものが点々とあつたりします。それらをどう統合していくかが課題になってきているからです。やってみると、異なるタイプのデータをつなごうとすると、またいろんな問題が浮かび上がるんですよ。だからすぐに一般公開しないで、限定的な目的のために、たとえば学校や、図書館や博物館で使ってもらおうとかしながら、丁寧に問題をクリアし、共有化を進めていこうと考えているんです。

Fig 5 角田勝之助による写真（撮影地：金山町、1950年～1960年）

Fig 6 中俣正義による写真（撮影地：南魚沼市、1950年～1960年）

Fig 7 「光の記憶—南うおぬま地域映像アーカイブ」展示風景

Fig 8 「光の記憶—南うおぬま地域映像アーカイブ」の一環として行われたタブレットを使用した五十沢小学校での地域映像のワークショップ



Fig 5



Fig 6



Fig 7



Fig 8

みんなで作る「村の肖像」プロジェクト

映像で振り返る20世紀のかねやま



中央公民館では昔の映像を整理して、保存・活用する「村の肖像」プロジェクトに取り組んでいます。今回はプロジェクトの内容と、現在までの活動の様子をお知らせします。

『村の肖像』プロジェクトとは？

みなさんのお宅には、古いアルバムや8ミリフィルムが眠ってはいませんか？「村の肖像」は、町民のみなさんが大切に保管してきたかつての映像資料を、20世紀の町の姿を伝える貴重な文化遺産として位置づけ、様々な形でこれから活用していくことを目指す事業です。

これまでに町内8ヶ所で、茶話会を実施してきました。これは、地区の方々に写真の提供を呼びかけ、みんなで持ち寄った写真を見ながら、写真にまつわる思い出や疑問、感想などを自由に話し合う集まりです。各会場に寄せられた写真からは、厳しくも豊かな自然の中で互いに協力しな

がら暮らししてきた金山町の人々の姿や、只見川ダム開発をはじめとした様々な出来事を町がいに受け止めてきたのが、いきいきと見えてきます。

茶話会にご参加ください

この茶話会は資料の収集の場であるとともに、世代を超えて町の歴史や文化を学ぶ生涯学習と交流の場でもあります。みなさんからお寄せいただいた写真はもちろん、会場で楽しく語っていただいた思い出や疑問が「村の肖像」を育てます。写真をお持ちでない方も、過去の金山町を知る人もそうでない方も、ぜひお気軽にお越しください。開催地区以外や町外からのご参加も歓迎しています。

『村の肖像』が目指すもの

茶話会を通じて収集した映像とその関連情報は、将来的にはコンピュータ上で検索、閲覧可能な形にまとめ公開します。研究、教育活動、町の情報発信など、工夫次第で幅広い用途に使用可能なデータベースを目指します。

なお、この取り組みの途中成果については、中央公民館図書館にて写真アルバムとして順次公開しています。また、町のフェイスブック等でも随時情報発信を行っています。



新潟大学との連携

データベースの構築、公開に当たっては、新潟大学人文学部が取り組む「いがた地域映像アーカイブ」

プロジェクトと連携、協力することを計画しています。金山町と経済的、文化的にも繋がりの深い新潟県およびその周辺地域を対象とし、豪雪地・山間地の映像資料を多く扱う新潟大学との連携・協力は、効率的にデータベースを構築し、より広い視点から金山町とその映像資料を捉えることを可能にします。

この連携・協力は、金山町の魅力を映像を通じて全国の人々に伝えるとともに、映像研究の進展に貢献することにも繋がっています。

この計画に先駆けて「いがたMALUI地域連携データベース」では、角田勝之助さん（玉梨）が昭和20年から30年代に撮影・整理してきた約七百余枚の写真を公開しています。新潟大学に申請することで、玉梨・八町地区を中心とした懐かしい町や人々の姿をインターネット上で閲覧することが出来ます。

（いがたMALUI地域連携データベースアドレス <http://archhuman.niigata-u.ac.jp/malui/>）

中央公民館図書室では、プロジェクトの成果を公開しています！



茶話会の開催

- ① 資料及び関連情報（いつ・どこで・なにを・だれが・どのような瞬間を撮った写真なのか）の収集
- ② 町の歴史・文化を学ぶ生涯学習の場、世代を超えた交流の場の創出

報告・活用

- ① 茶話会の成果をまとめたアルバムを作成し、中央公民館図書室で公開
- ② 町公式フェイスブック等を通じて発信を行い、さらなる情報提供を呼びかける
- ③ 利活用を積極的に進め、その経験をデータベース構築に活かす

資料整理

- ① 各資料に資料番号を付与し、デジタル化、関連情報を整理する
- ② 必要に応じて、追加の聞き取り調査・文献調査等を行う

データベース構築・公開

『村の肖像』プロジェクト成果の検索・閲覧・利用（平成30年度予定）



「地域と映像アーカイブ——記憶とデジタル化をめぐる実践と研究」

原田健一・水島久光編

学文社 2018年2月刊行予定

まえがき 一生の痕跡をどう扱うのか 原田健一

□ デジタル・アーカイブをどうデザインするか

第1章 水島久光	ソーシャル・デザインとしてのデジタル・アーカイブ	13 頁
第2章 前川道博	地域の知の再編「地域デジタルコモンズ」の実現に向けて	22 頁
第3章 原田健一	「可能現実存在」としてのデジタル・アーカイブの作法	15 頁

Ⅱ アーカイブの実践と地域

第4章 水島久光	ゆうばりアーカイブがつなぐもの ー地域映像アーカイブの構築と活用に関する課題	16 頁
第5章 浅岡隆裕	地域社会における近い過去の歴史表象の意味	18 頁
第6章 板倉史明	地域ネットワークの集積拠点（ハブ）を構築する ーアーカイブと大学の連携活動から	15 頁
第7章 石田佐恵子	エフェメラメディアを凝視する ー万年社アーカイブ・CM データベースの事例からー	20 頁
第8章 キム・ジュニアン、石田美紀	教育と研究におけるアニメ中間素材のアーカイブ化	20 頁
第9章 榎本千賀子	「村の肖像」制作の現場から： 福島県大沼郡金山町における映像アーカイブ構築	22 頁
第10章 原田健一	「コミュニティ」の映像 ー地域・メディア・研究をつなぎ直すー	20 頁

□ アーカイブするための方法と学習

第11章 松谷容作（同志社女子大）	日常のアーキビスト ーデジタル映像アーカイブにおけるアーキビスト教育にむけたー提案	
第12章 北村順生	地域映像アーカイブを使ったワークショップ	
第13章 佐藤守弘	郷土を調べる子どもたち ー『北白川こども風土記』におけるアーカイブする実践	18 頁

Ⅳ 領域横断的分析ー複数の手と眼差しによる荻野茂二フィルム

第14章 原田健一・水島久光	共同作業による映像研究	4 頁
第15章 原田健一	工房としての荻野茂二ー多産な映像器械の産出構造ー	10 頁
第16章 榎本千賀子	欲望の居所をつくるー荻野茂二とオギノ8ミリ教室	
第17章 小河原あや	「愛好家」の映像アーカイヴ ー荻野茂二をめぐる「公ー私」の視点から	8 頁
第18章 北村順生	近代都市と労働者へのまなざしー荻野茂二と能勢克男の場合	8 頁
第19章 棕本輔	ミクロな映像を“群”として視ることとわかる“意味”	8 頁
第20章 水島久光	荻野茂二と「映画」との距離について	12 頁

あとがき 骨とフィルムー残すこととは何か 水島久光